



「前に紹介してもらった金子みすずの街 長門市仙崎へ行ってきたよ。」

金子みすずの詩の札が家々の軒先に下げられていて、それを眺めながら ゆっくり歩いてざごく 良かったよ」

高校時代の友からそんな話を聞いて、金子みすずの詩とともに、街もそんなにかわったのか・・・と。

6月9日 山口県美祿でくつろいでいて、ふっと友達の言葉を思い出して、半日ぶらぶら仙崎の町を歩きました。

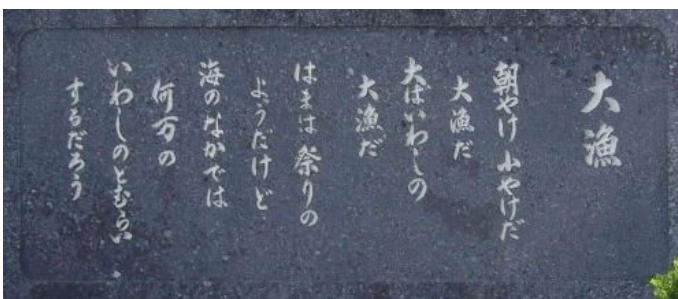
金子みすず

1903年 山口県の日本海側の漁港 仙崎(今の長門市仙崎)生まれ。 大正末期、すぐれた作品を発表し、西條八十に『若き童謡詩人の巨星』とまで称賛されながら、昭和5年(1930年)26歳の若さで自らの命を断つ。没後その作品は散逸し、幻の童謡詩人と語り継がれるばかりとなったが、童謡詩人・矢崎節夫さんの長年の努力により遺稿集が見つかり、金子みすずの詩が没後50年をして、世に出ることとなった。

花や鳥・魚などみじかな自然に向けられた暖かいまなざしとよわきものへのいたわりなどその優しさに貫かれた素朴な言葉で語りかける数々の詩句が多くの人々の心をうち、金子みすずブームを巻き起こし、小学校の教科書にも採用されている。

金子みすず 本名テルは明治三十六年四月十一日に山口県大津郡仙崎村(いまの長門市仙崎)に生まれました。やさしい人々と美しい風土にはぐくまれ、幸せな少女期を過ごしたみすずは二十歳の時、下関に出て親戚の上山文英堂書店の手伝いをしながら、童謡を書き始めました。その処女作「お魚」を読んだ西條八十はこの感じはあの英国のクリステイナ・ロゼッティと同じだと絶賛。ついに「若き童謡詩人中の巨星」とまで言われるようになりましたが、昭和五年三月十日、幼い娘と五百十二遍の童謡を残してこの世を去りました。二十六歳の若さでした。

「大漁」をはじめとするみすずの童謡は、小さなものはもちろん、この世にあるすべてのものに深いまなざしを注いだやさしさに満ちたものでした。やさしさが失われがちな今日、みすずは童謡というかたちを通していのちの尊さと真のやさしさを私たちに思い出させてくれます。



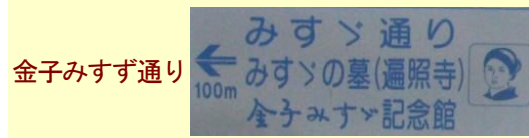
長門市駅から一駅だけの盲腸線が海まで伸びていて、終点が仙崎。仙崎のすぐ向かいには青海島があって、この青海島が外海の荒波をふせぎ、内側に仙崎湾が広がる良港を作り、日本海側有数の漁港・漁師町であり、また、かつては鯨漁のさかんだったところである。また、青海島の外海側は日本海の荒波に海岸がけづられ、紺碧の海に絶壁・奇岩が続く景勝の地で、仙崎は青海島への観光基地でもある。

私をはじめ 仙崎を訪れた数十年前は仙崎駅から港へ通じる道は人でごった返していた記憶がある。しかし、今はそんなにぎわいも遠のき、静かな漁師町である。

私が美祢にいた頃を含め、この20年金子みすずの詩が世に出て、その暖かいまなざしの詩に 全国で金子みすずブームが静かに浸透。一人ぼっちの寂しさに耐えながらも 高ぶることなく静かに語りかける言葉の数々の中に、私も気持ちを通わせ何冊か買って持っています。また、その後 仙崎の駅にみすず資料館ができたり、映画やTV ドラマなどが作られたりして、それらも見ましたが、仙崎の街中を意識したことなく、友達にいわれるまで、仙崎の町が 金子みすずの暖かさが感じられる街に変わっているなどまったく 気がつきませんでした。

金子みすずが仙崎で少女時代を送った頃は随分にぎわっていた頃である。金子みすずが生まれ、育ったのは仙崎駅から港へ通じる本通りで、両側には商店が立ち並び、仙崎で一番にぎやかな通りであったが、青海大橋が開通し、長門から仙崎の港そして大三島へ広い自動車道が海岸沿いに通じ、港のにぎわいも消え、商店が立ち並ぶ本通も人通りがだんだんなくなってしまいました。

私のいた美祢からは車で20分足らず、魚が食べなくなったり、青海島へ休日出かけたりした頃には生気のない随分さびれたなあ…というのが私の印象でした。



金子みすず通り

仙崎駅から港への本通の商店通りが 「金子みすず通り」と名づけられ、街の人たちによって金子みすずの暖かさを感じられる町に変わっていました。
 通りの家々の軒先には 金子みすずの詩がつづられた手書きの札がつるされ、また、中ほどにある生家の場所に立派な金子みすず記念館が建てられ、静かな雰囲気の中で、みすずの詩を刻めるようになっていました。



金子みすず通り 通りの中心部に 金子みすず記念館がある 2007. 6. 9.



仙崎のみすず通り 家々の軒先には金子みすずの詩を書いた手書きの札がつるされていました



家々の軒先に吊るされた金子みすずの詩 金子みすず記念館 2007. 6. 9.

仙崎駅から海岸までの数百メートル 観光地のけばけばしさもなく、これといったものもないのですが、海からの潮風を感じながら 軒先につるされた金子みすずの素朴な詩のひとつひとつに浸りながらのWalk。金子みすずの好きな人にはたまらないでしょう。 関東の足尾の山の自然の中に星野富弘さんの美術館があるのですが、そこへ行った時と同じゆったりした気分を感じました。 街の通がそのまま手作りの金子みすず館と言ったところで、歩く通りのここかしこで 「金子みすず」のまなざしに見られているよう。 久しぶりに「金子みすず」に出会って 爽快な気分 老いの寂しさもひきうけてくれそうな「みすずの詩」にゆったりした気分になりました。

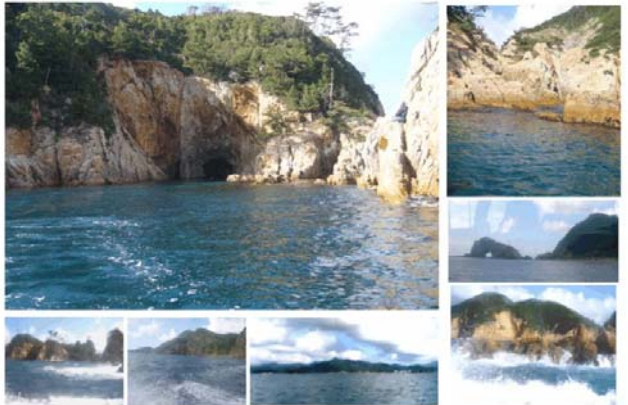
金子みすず記念館には 金子みすずの詩にいろいろな人が絵をつけた色紙や絵がいくつも壁にかけて展示されている。 以前「童画」「美人画」の中島潔さんの 「中島潔が描く金子みすず」展を見てすごく感動したことがある。 金子みすず館には中島潔さんの描く「金子みすずの詩の世界」の作品が一点もなく、是非とも 中島潔が描く金子みすずの世界もくわえてほしいなあ・・・と。

記念館の人によると同じ事を言われる人が時たまあると聞きました。 是非そうしてほしいものです。 この通りをぶらぶら抜けると青海大橋のすぐ横にでて、青海島を見ながら海岸沿いをもどると仙崎漁港。 こちらは長門観光の目玉・青海島への観光船が出る観光スポットで、この港の一角にも金子みすずの代表作「大漁」の詩碑がある 青海島のウリは紺碧の海の色と断崖絶壁の続く荒々しい外海海岸の岩めぐり。最終便がちょうど出るというので、こちらもう久しぶり。 波が荒くて 途中までしか 近づけませんでした。 グラスで覆われた船に容赦なく波しぶきが当たり、豪快な青海島の岩と海の色を楽しみました。

ひさしぶりに海を見ながら長門・仙崎のwalk 手作りの金子みすずの詩の札が街の通りを見守っている。 友達に教えてもらうまで、こんなにゆったりすごせる街になっているなんて知りませんでした。 熟年者の鈍行の旅にはお勧めです。

また もう よくご存知だと思いますが、金子みすずの詩も是非 お勧め。 ぶらぶら 仙崎の港から長門の町まで帰ってくるともう 夕暮れ 次の汽車まで 30分 駅のホームに座って 美祢への列車を待地ながら

2007. 6. 9. Mutsu Nakanishi



私と小島と鈴と

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小島は私のやうに、
地面を速くは走れない。

私からだをゆすつても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小島と、それから私、
みんなちがつて、みんないい。

